

児童文学に見るアメリカとイギリス

棚 瀬 江里哉

英語圏の両大国であるアメリカとイギリスは、また、児童文学の宝庫でもある。日本における両国の作品の翻訳、出版、紹介も非常に盛んである。この両国はほぼ同じ言語を用い、初期のアメリカはイギリス植民地でもあり、文化的に大きな影響を受けてきた。しかし、それぞれの国にはやはりそれぞれの国民性が存在するのであるし、児童文学にもそれぞれの特徴がある。以下で、アメリカ、イギリス、それぞれの国の特徴が良く表われていると思われる児童文学作品をとりあげ、考えてみたい。

まずアメリカ児童文学について述べる前に、アメリカ合衆国の歴史の独自性について考えてみたい。アメリカはイギリスや他のヨーロッパ、あるいは世界の他の地域と比べても共同体、国家としての形を成したのが非常に新しい国である。(本稿は英語文学を対象としているので、アメリカ先住民に関しては触れないことにする。)この新世界の住民たちは、旧世界ヨーロッパと離れている。しかも、次に述べるように、植民者たちの大きな部分は自らすすんで旧世界を捨ててやってきた者たちだった。つまり旧世界の歴史、伝統をもあえて捨てて自らの新しい歴史を創ろうと考えたグループであり、その代表者がピュリタンである。イギリス国教会の腐敗に反対し、それを浄化(ピュリファイ)しようとしたグループがピュリタンであり、イギリス国内で清教徒(ピュリタン)革命を起こすことになるが、これとは別に、イギリス本国に見切りをつけ、別の新天地で自分たちの望む理想の宗教社会を作ろうと考えた一団がい

た。彼らは、1620年有名なメイフラワー号を第一陣として米国東岸北部のプリマス、次いでボストンなどへとやってきた。現在に至るまでアメリカ東北部はニューイングランドと呼ばれている。それより先、1607年にすでに東岸南部のヴァージニアに入植がなされていたが、アメリカの政治、文化の中心はニューイングランドとなった。アメリカの社会、国民性、そして文学にも大きな影響を持つことになった出発点は、我々は世界の範たる理想の社会を作り上げるのだ、という強烈な意識だったのである。この意識は様々に形を変えながらも現代に至るまで受け継がれることになる。

入植以後のアメリカの歴史において、ある意味でもっともアメリカらしい時代、西部開拓の時代を舞台にした作品、ローラ・インガルス・ワイルダーの「小さな家」シリーズをとりあげてみたい。日本でもテレビドラマとして放映された『大草原の小さな家』の原作であるが、『大草原の小さな家』は原作ではシリーズ全9作のうちの1作でしかない。シリーズ第1作『大きな森の小さな家』ではほんの幼女である主人公ローラは、最終作『はじめの四年間』では幸せな新婚生活をおくる主婦になっている。用いられている文体が第1作ではいかにも幼児らしい簡単な英語、その後は、児童向けではあるが大人びてくる、というこのシリーズは、やはり日本でも人気のある『赤毛のアン』とも共通する少女一代記と言えるものである。(主人公の年齢にはずれがあるが。)さまざまな喜びや悲しみ、家族や友人とのふれあい、ライバルの存在、

恋愛と結婚、そして全体を通じての成長、といったテーマが見られる。しかし、アンは、つましくはあったが安定した社会に所属していた。ローラは違う。シリーズを通じて舞台は移り変わっていくのだが、単に引越をしているのではなく、開拓をしながら移って行くのである。

先に述べたように、初期アメリカの歴史は、植民者たちが大西洋を渡ってきたために、東海岸からスタートした。人口が増え、町が発展し、土地が足りなくなってくると必然的に発展のベクトルは西に向かうことになる。これがアメリカの西漸運動、西部開拓であり、そのメカニズムはこう考えられる。ある地域が開拓されおわり、土地が足りなくなると、そこから人々が出て行って未開拓地を開墾する。これが単独の家族で行なわれる場合も多いのだが、いずれはその付近を開拓する他の家族も現われ、まず数家族の小さな共同体ができ、さらに人が集まり教会、商店、学校などを備えた町となる。ここもいっぱいになるとまたある者たちが、町を出て未開拓地に向かう。このくりかえしである。こういう開拓地にできた新しい町、言わば見知らぬ者たちの共同体では自分の意見をはっきりと主張しなければやっていけない。それと同時に意見の食い違いを調整するルールとして民主主義が重要な意味を持つことになる。こういった西部開拓の諸相をワイルダーは実にみごとに描き出している。シリーズ中それぞれ舞台は違うのだが、「大きな森の小さな家」にまず住み、その後「大草原の小さな家」に移り、さらに「大草原の小さな町」と続く作品タイトルの変遷は象徴的と言えよう。開拓地と未開拓地、文明と大自然の境界をフロンティアと呼ぶ。新しいことにすすんでチャレンジする開拓者精神に富み、地に根を張りつつも理想を持ち、さらにはローラのパパのような強

くてたよれる父とローラのママのようなやさしくてしっかり者の母がいた西部開拓時代のフロンティアはアメリカ人にとっての一種の心のふるさと、古きよき時代と言えよう。

アメリカ文学に表われてくる大きなテーマの一つに、文明と大自然の対立、もしくは対比がある。西部開拓は大自然（＝未開拓地）の文明化ととらえることもできる。ワイルダーと同じように開拓時代の文明と大自然を描きながら、非常に異なっている作品がある。児童文学というだけでなく、アメリカ文学中の傑作、『ハックルベリ・フィンの冒険』である。主人公ハックはもともと浮浪児として文明社会のアウトサイダー的存在であったが一時ダグラス未亡人に引きとられ、社会に適応し、その一部分となることを強制させられそうになっている。具体的にはしつけを受け、人なみの生活を学ばせられているのだが、行方不明だった飲んだくれの父親の帰還をきっかけに町を逃げ出す。途中で黒人逃亡奴隷のジムと道連れになり、ミシシッピ川をいかだで下りながらさまざまな冒険をする。二人が巻き込まれる事件は、憎しみ合う二家族のかたきうち、さぎ、殺人、リンチなどである。これらの事件はすべて人間性の悪い面を示しており、注目すべきことはこれらはすべて立ち寄った町で起きているのに対し、いかだに乗っている時はすべてがおだやかで牧歌的なのである。二人が下るミシシッピ川は全米一の大河であり、町に疲れた二人をやさしく迎えてくれる母なる大自然と考えることができる。ここに、町（＝文明）とミシシッピ川（＝大自然）の対比があり、さらに、トウェインの描くところによれば、文明は人間性の墮落を示し、大自然の方にこそ救いがある、ということになる。トウェイン自身は西部で生まれ育ち、自然児、野性児的な面を持っていた。しかし、彼は東部に移り住み、アメリカの文

明社会を代表するような名門の女性と結婚した。二人の結婚生活が不幸であったとは言われていないが、トウェインの心の中に東部に対する微妙なこだわり、ある意味でのきゅうくつさがあったとしても不思議ではないだろう。作品のラストでハックはインディアン居住地にむかうつもりだと述べる。そのわけは、サリーおばさんが自分を人並みにしようとしていて、それが我慢できないからである。インディアン居留地とは、言い換えれば、未開の大自然である。そして「人並みにする」は原文では“sivilize” (=civilize=文明化) である。トウェインがこの作品を発表したのは1885年、アメリカではフロンティアが西海岸に達し、西部開拓の時代は終わりを告げようとしていた。それまでは当然のことであり、そうすべきだと考えられていた自然の文明化に対してトウェインは大きな疑問を投げかけたのである。

トウェインが批判的に描き出した文明社会の欠点の中でも、作品中で奴隷制は大きな位置を占めている。逃亡奴隷ジムに対するハックの考え方をたどることによって、この作品のもう一つの大きなテーマを読みとることができる。書かれた時点ではすでに奴隷解放宣言がなされていたわけだが、作品の舞台は1840年代、奴隷制は強く残っていた。その頃は逃亡奴隷を助けるのはもちろん、見逃すだけでも罪だったのである。これは法律上の罪であるだけでなく、道徳的にもおそろしく悪いこととされていた。ハックも、アウトサイダーとは言え、この社会的通念に染まっていたので、ジムと旅をしている間、しばしば良心の呵責におそわれる。自分は何と間違った、恐ろしいことをしているのだらうと思ったのである。ジムのことを通報するという、立派な正しいことをしようという気も時々起きるのだが、そのたびに思いとどまってしまう。

そしてジムがある町でついにつかまってしまった時、ハックは最終的な決断を下す。「よし、地獄に行ってやろう」と自分に言い、ジムを助け出すことに決める。以後は決心は揺らがない。ここで注意しておくべきことは、十九世紀半ばのアメリカの少年にとっては、地獄の恐ろしさは少なくとも現代と比べて、はるかに現実的なものだった。実際ハックはこのせりふの前に、恐怖のあまりくずれ落ちそうになったりふるえあがったりしている。それでも決意したのである。その瞬間にこそ、当時の文明社会の、トウェインからすれば、誤った考えにとらわれた状態から脱け出し、ハックは自らの考え、意志で行動することを身につけた。すなわち、自我を確立したのである。

主人公の成長はアメリカ文学においてしばしば見られる重要なテーマである。ここで二つの現代作品を『ハックルベリ・フィンの冒険』と比較してみたい。サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』と E. L. カニグズバークの『クローディアの秘密』である。前者は児童文学とは言えないが、いわゆるヤングアダルト向けの現代の古典とも言うべき位置を占めている。主人公ホールデン・コールフィールドはドロップアウトの常習者であり、今度もペンシー高校を退学になったが、両親にそれを知られたくなく、ニューヨークの町をさまよい歩いたあげく一種の神経衰弱状態におちいり、サナトリウムで療養の身となる。一方、後者の主人公クローディアは成績オール5の優等生であるが、そんな自分の日常がいやになり弟のジェイミーを連れて家出し、ニューヨークのメトロポリタン美術館の中にひそみ暮し最後には家に戻ってゆく。ホールデンはハックと同じくアウトサイダー的存在であり、自分が受け入れがたかった社会 — ハックの場合には町だったがホールデ

ンの場合は学校 ― を飛び出す。しかしホールデンにはもはや大自然は残されておらず、野生児ハックのようなたくましい行動力もない。実際、ホールデンはヒッチハイクで西部に向かおうという妄想をもてあそぶが、実行には至らない。クローディアはこの二人とはちがうが、自分の属している社会 ― 彼女の場合には家庭や学校での日常生活 ― がいやになり飛び出すという点では共通している。そして家出の結果はどうなったか。クローディアは美術館で見つけたミケランジェロ作と言われている彫像に関する秘密を手に入れる。秘密は心の中で力を持ち、クローディアは今までとは違った幸福な人間として家に帰ることになる。ではホールデンはニューヨークでの経験を通じて何かを得たのだろうか。物語の中では明白に述べられてはいない。しかしラストの部分で彼は、今まで出会ったいやな人物たち、いんちき野郎として毛ぎらいしてきた奴らでさえ、そこにいないときびしく感じると述べている。その潔癖さゆえに病的なまでに少しでも偽善が感じられる他者を排除してきた彼が、それらはそれらとして受け入れる徴候ではないだろうか。こうして見てくると、この三人には共通のパターンが読みとれる。今まで暮していた日常、すなわち町、学校、家庭などを抜け出し違う場所に行く。そこで何らかの体験をして今までとは違った自分になる。ハックは自我を確立し、クローディアは秘密を手に入れ、ホールデンは他者の受容を学び始める。このパターンはイニシエーションと呼ばれるものである。イニシエーションとはもともと文化人類学の用語で、「通過儀礼」と訳される。子供が、ある儀礼を経て大人の社会の一員として迎え入れられることであり、象徴的な死と再生というパターンが用いられる。つまり、この三人に関して言えば、それぞれの日常を抜け出した

時に、社会的には一旦象徴的に死んだのであり、その後ミシシッピやニューヨークでの経験を経て、成長した人間として新しく生まれ変わったということになる。

今まではアメリカのリアリズム作品を見てきたが、ここでファンタジーに目を向けてみることにする。二つの作品を取り上げてみたい。E. B. ホワイト作『シャーロットのおくりもの』の舞台は平凡な田舎町の平凡な農家であり、そこに住むクモのシャーロットと子ブタのウィルバーが主人公である。クリスマスの料理にされる運命にあったウィルバーをシャーロットがクモの特技を活かして救う、というストーリーで、自然の営み、季節のくり返し、死と誕生といったテーマを織り込み、実に感動的である。一方、マドレン・レングル作『五次元宇宙の冒険』は宇宙を舞台としたSFで、1962年の児童文学作品ながらすでに今でいうワープ理論を取り入れ、全宇宙的な善と悪の力の戦いをテーマにしている。一見非常に趣きの異なるこの両作品は、しかし、根底に共通のものを持っている。それは愛の力というものを、ある意味ではナイーブに、前面に打ち出している。ということである。『五次元宇宙の冒険』において主人公の少女メグは弟チャールズ・ウォレス、ボーイフレンドのカルヴィンとともに強大な悪の力が支配する惑星に捕われている父親を救い出しに行く。自分よりはるかに強力な敵との戦いで、メグに最後に勝利をもたらしたのは悪そのものである敵にとって理解を超え、受け入れられないもの、愛であった。弱い人間として、メグは敵を愛することはできなかったが、チャールズ・ウォレスに対する愛によって、父親と入れかわるよう敵に捕えられてしまっていた彼を取り戻すことができたのである。このテーマは続編 *A Wind in the Door* にも引き継がれ、人間として成長

したメグは、まず人間としてもっとも忌むべき存在であったジェンキンス先生を愛し、受け入れ、仲間とし、最後には究極の敵、空虚な非存在エクソロイをも愛し、満たし、ふたたびチャールズ・ウォレスを救うことに成功する。キリスト教における愛とも重なる、他者を救う愛は、シャーロットの中心テーマでもある。何のとりえもなく、シャーロットのために何かをしたわけでもないウィルバーであるが、シャーロットは彼を救うために献身的に働き、最後には自らの命をも縮める。しかし彼女が望んだとおり、ウィルバーは生きながらえ、長い幸せな日々をおくる。この両作品に見られる愛による救いは、逆に言えば愛があれば困難な状況を解決することができる、という一種の楽天的な理想主義ともつながるアメリカ的テーマと言えよう。

イギリスについてもまずその歴史の独自性から見てみたい。先に述べたようにアメリカの歴史は旧世界の伝統を離れたところから出発しており、理想主義が色濃く流れていた。それではイギリスはどうであろうか。まず当然ながらアメリカより歴史が長い。そして複雑である。アメリカでは植民より現在に至るまでアングロサクソン系民族が社会の中心である。さまざまな人種、民族の流入の波を受け入れつつ、それらを「アメリカ人」として取り込んできた。これに対して特に中世以前のイギリスにおける民族興亡の波は激しい。支配的な民族のみを挙げてもケルト人、ローマ占領軍、アングロ・サクソン人、そしてウィリアム征服王ひきいるノルマン人である。このほかにもゲルマン、北欧系の諸部族が来襲、部分的に占領したりしている。そしてこれらの諸民族はその時々で完全に入れかわったわけではない。すなわち、あるいは撤退し、あるいは辺境に追われ、あるいは徐々に同化していったのだが、いずれの場合にもその文化

的影響を残していったのである。ノルマン征服によりフランス語、ラテン語の影響を受けた新しい英語が生まれたのはその顕著な例であるが、児童文学という観点からすれば、特に重要なのはそれぞれの民族が残した民間伝承であった。おとぎ話、妖精物語、神話といったものである。これらは採話するだけで児童向けの読み物となりうるわけだし、近現代の児童文学にとってより重要なのは、作家にとってのインスピレーション、想像力をかき立てるもの、そして作品の直接の素材となりうることであった。ゲルマン、北欧の神話、そしてローマ軍のもたらしたローマ神話（及びこれと結びつくギリシア神話）はむしろ重要であるし、近年は特にケルト系のウェルズ神話である『マビノーギオン』がアラン・ガーナーをはじめとする作家たちに用いられている。イギリスの複雑な歴史は児童文学にいわば宝の山を残したのである。

イギリス児童文学はファンタジーの宝庫とよく言われる。誰でも知っているようなものをざっとあげても『くまのプーさん』、『くまのパディントン』、『メリーポピンズ』、『ドリトル先生』などがあり、児童文学に興味がある人なら誰でも知っているもの、とするとりストはあっという間にふくれあがる。まさしく宝庫と言えよう。ファンタジーは現実には決してありえないことを描くものである。物語、フィクションというものはもともと作者も読者も想像力を用いるが、ファンタジーは想像力を特に自由に羽ばたかせたものとも言える。そして先ほど述べたように、神話や妖精物語は現実を離れ、時間・空間を超え、想像力をかきたてるはたらきを持つ。また、民間伝承としてその風土に根づいているわけだから、受け取る読者の側にも広く行き渡っている。つまり想像力にあふれた作品を喜んで受け入れる素地ができていると考えられる。

イギリスをファンタジー王国たらしめている背景の一つはここにあるのではないだろうか。

イギリス・ファンタジーの中でも、神話的わく組を持つ壮大なスケールのファンタジーを描いたのが C. S. ルイスと J. R. R. トールキンであった。この二人は多くの共通点を持つ。ともに本職は中世研究の優秀な学者であり、敬虔なクリスチャンであり、インクリングズという一種の学者サロンのメンバーで友人同志であり、神話に興味を持ち、ファンタジー作品を書いた。ルイスの児童向けファンタジーは「ナルニア国ものがたり」という全7冊のシリーズである。シリーズの舞台となるナルニアは、地球とは別の世界であり、主人公の少年少女たちはさまざまな方法でイギリスからこの架空の別世界に入り込み、色々な冒険をする。単なる少年少女冒険ファンタジーとしても各作品ともにわくわくさせる展開、あざやかなイマジネーション、心に残るキャラクターたちに富む傑作である。また、現実と非現実を結ぶファンタジーの大きなポイントの一つである「こちら」から「あちら」への通路にしても、第1作『ライオンと魔女』の衣装ダンス、『朝びらき丸 東の海へ』の絵、『魔術師のおい』の指輪と森と泉などどれも効果的に使われている。そしてシリーズ最終作『最後の戦い』にいたっては「死」というおそろべきものを通路に用い、しかもそれがシリーズ全体のテーマと直接に結びついている、という力業を用いている。

しかしこのファンタジーシリーズの顕著な特徴と言えやはりその壮大なスケールであろう。単に全7巻の大作というだけではない。『魔術師におい』ではナルニアの天地創造が描かれ（この作品がシリーズ第6作に置かれているのは構成の妙と言えよう。）『最後の戦い』ではナルニアの終えん — 国としての滅

亡ではなく世界の終わり — が描かれる。そして、天地創造から世の終りまでのこの壮大な物語はキリスト教のわく組の中で描かれている。もちろん聖書、またはキリスト教の教義をそっくりそのまま用いているわけではないが、非常に容易に多くの重大なパラレルを読み取ることができる。その中でも最も重要と思われるものをいくつかあげておく。『ライオンと魔女』においてライオンの姿の偉大なる王アスランは裏切り者エドマンドの命を救うため自らの命を犠牲にし、そののちよみがえり悪の魔女との戦いに打ち勝ち、エドマンドも立派な王の一人となり、ナルニアは黄金時代をむかえた。これは明らかにイエス・キリストのあがないによる罪の救いと重なるものである。またナルニアにおける世のはじまりと終わりを見てみると、天地創造においては、何もないやみから、アスランの呼びかけに応じて星と太陽、植物と動物たちが生まれてくる。これは聖書に描かれている天地創造と重なるものであるし、世の終わりにおいては、あらゆる生き物が扉の前で二つに分かれ、アスランに従う者たちは扉を通して永遠に幸せが続くアスランの国へ入って行く。これもキリスト教の終末論、最後の審判と重なるものである。これらのパラレルにおいて常に中心にいるのはナルニア世界の神、もしくはイエス・キリストに例えられるべきアスランである。『朝びらき丸 東の海へ』のラストで、アスランが主人公の少年と少女にお前たちは二度とナルニアを訪ずれることはない、と告げるシーンがある。アスランに会えなくなるのは耐えられないと絶望する二人に、お前たちの世界でも私と会うことになる」とアスランは述べる。「…あちらの世界では、わたしは、ほかの名前をもっている。あなたがたは、その名でわたしをわかるように、おぼえていかねばならない。そこにこそあなた

がたがナルニアにつれてこられたほんとうのわけがあるのだ。ここですこしはわたしのことを知ってくれば、あちらでは、もっとよくわかってくれるかもしれないからね。」(P. 302) ナルニアでアスランのことを知ることで、この世界においてイエス・キリストのことをより深く知ってほしい—これはアスランから二人へのメッセージであると同時に、熱心なクリスチャンであり、キリスト教の啓蒙書の著作もある作者ルイスから読者へのメッセージととることもできる。

もう一つ注目すべきことは、登場人物の多くをギリシア、ローマ神話、ゲルマン、北欧神話に負っていることである。フォーン(牧羊神)は第1巻の重要キャラクターであるし、ほかにもセントール、ドリアド、ナイアド、バックス、シレノスなどのギリシア・ローマ系が登場する。小人、巨人、狼男なども神話、伝説上のものである。神話を好んだルイスであれば、これらを作品に取り入れても不思議はないが、キリスト教のわく組の中で本来異教のものであるこれらを用いたところが興味深い。

次に、トールキンのファンタジー作品はいくつかあるが、中でも重要なのが「中つ国」と呼ばれる世界を舞台にしたものである。「中つ国」とはナルニアのような架空の別世界であるが、ナルニアと違うのは、地球とはまったく別の、行き来もまったくない、完全な別世界だということである。トールキンは驚くほど緻密にこの別世界を創りあげた。地理は言うに及ばず、歴史は上古の神話時代からの記述が残され、有史以降は年表が編まれ、この世界の独自の言語体系まで存在する。(これは言語学者であったトールキンだからこそ可能だったことであろう。)中つ国に住む主な種族は三つ、人間とドワーフとエルフである。ドワーフとエルフは本来伝説上の小人と

妖精であるが、トールキンはそれぞれに独特の性格付けをしている。これら三種族のほかには善悪さまざまな生き物が存在し、なかんずく重要なのはホビットと呼ばれる種族であった。トールキンのオリジナルな創作である彼らは、小人族だが、荒々しくがっしりしたドワーフと比べてうさぎを思わせ、外見は弱々しいが中には強いものを秘めていた。世界の辺境にひっそりと暮らしていた彼らは他の種族にほとんど知られていなかったが、中つ国の歴史において決定的な役割を果たすことになる。

中つ国を舞台にした最初の作品『ホビットの冒険』はホビットがドワーフとともに邪龍から宝を奪い返しに行く冒険譚で、ユーモアとヒロイズムが適度にまざり合った傑作である。しかし何と言っても次に発表された『指輪物語』三部作こそが現代イギリスファンタジーを代表する大作であり、その後のファンタジー作家にも極めて大きな影響を与え、中つ国を描いた作品の中核ともなっている。主人公は前作の主人公ビルボのおいのホビット、フロドで、忠実な連れのサムとともに、中つ国を征服しようとしている悪の魔王サウロン力の源である一つの指輪を消滅させるという使命をおび、恐るべき苦難の果てにこれを達成する。前作と比べユーモアははるかに少なくなり、より英雄的でより悲劇的な面が強く表われてきている。善と悪の壮大な戦いのドラマは善の勝利に終わるのではあるが、善の側にもしばしば尊い、あるいは無残な犠牲が出る。さらに、物語のラストでは、いやせぬ傷を負ったフロドが、善の側の中心的存在であったエルフたちとともに、中つ国を去ってゆき、勝利の栄誉と喜びよりは、一つの時代が終わるさびしさと悲しみを感じさせるものになっている。そしてその後他の種族が衰退し、人間が支配する世になってゆ

くと追捕の年表に記されていることを考えてみると、この作品は北欧神話の、特に神々の黄昏の、わく組を用いていると考えられないだろうか。

ルイスはキリスト教のわく組の中で神話をを用いた。やはり敬虔なクリスチャンであったトールキンは作品中でキリスト教をとりあつかっていないのだろうか。同じく善悪の戦いを描いたルイスの『ライオンと魔女』ではアスランは復活し勝利した。『さいごの戦い』では世界は滅んだがアスランに従う者たちはアスランの国に迎えられた。これらと同じような救いは『指輪物語』の勝利にはない。また、アスランと比べられるような大いなる善の力も物語中では描かれていない。しかし中つ国を舞台にした最後の作品『シルマリオン』を読むときわめて意義深い事実が明らかになってくる。この作品は、トールキンの死後息子のクリストファー・トールキンが編集したもので、『指輪物語』の年代記にもほとんど記されていない、上古の神話時代を描いている。それによると、中つ国を形作ったのはヴァラールと呼ばれる神々だったのだが、さらにその上位に唯一神エルーが存在していた。エルーこそがヴァラールと宇宙を産み出し、エルフと人間も産み出したのだった。(ドワーフはヴァラールの一人アウレによって造られた。)この二重構造においては、ヴァラールはギリシア・ローマ神話や北欧神話の神々に比較しうるし、最高神エルーはキリスト教の神と重ねることができるだろう。また、ヴァラールの中でもっとも力と才能があったメルコールは自らの欲望と傲慢のため墮落し、エルーに背き、中つ国における悪の根源モルゴスになってしまった。墮天使サタンと重なるこのモルゴスを、ヴァラールは激しい戦いのすえ打ち破る。このように『シルマリオン』にはキリスト教的宇宙観と大いなる善の力が

描かれている。しかしエルーは中つ国と直接の交渉は持つことはなかったし、ヴァラールは自分たちの国に害が及ぶのを恐れて中つ国の住民に対して門を閉じてしまった。それゆえ、モルゴスのかつての一の部下サウロンが強大な力を得た時、中つ国の住民はよりたのむものがなく、自らの力で苦しい戦いを挑まなければならなかったのである。これが『シルマリオン』によって明らかになった『指輪物語』の背景であるが、今一人の重要人物について述べる必要がある。『指輪物語』の反サウロン軍の実質的な指導者として采配をふるい、全軍の心の支えとなったのは魔法使いガンダルフだった。ところが彼は実はヴァラールによって、サウロンに対抗するためにつかわされた人物だったということが『シルマリオン』に述べられている。『指輪物語』において、ガンダルフこそが中つ国とヴァラール、さらにヴァラールがその意志を具体化するエルーとを結ぶ細い細い糸だったのである。ルイスは神話上の生き物たちを巧みに織り込みつつ、熱心なキリスト教信仰にもとづき深い精神性を持つ作品を書いた。一方、トールキンはキリスト教をかすかな底流として持ちながら、神話的わく組の中に圧倒的な厚みを誇る作品世界を築きあげた。まさにイギリスファンタジーの伝統と底力を示す二人と言えよう。

最後に、イギリスとアメリカそれぞれを代表する絵本として『ピーターラビットのおはなし』(ビアトリクス・ポター作・絵)と『ひとまねこざるときいろいろぼうし』(H. A. レイ作・絵)をとりあげ比較してみたい。ビアトリクス・ポターの名は湖水地方と分かちがたく結びついている。彼女は山と湖、牧羊地と農場が広がる風光明媚なこの地方の自然をこよなく愛し、ほとんどの絵本の舞台として用いた。『ピーターラビットのおはなし』の

舞台も湖水地方のどかな田園である。しかしストーリーは決してのどかではない。それどころか、いたずらっ子のピーターは母の言いつけにそむいてもぐり込んだ畑で、父を殺した百姓のマグレガーさんに見つかり、追い回されさんざんな目に会って命からがら逃げ出す、というなかなかシビアなものである。しかし全体的に見るとやはりそこはかたないユーモアが感じられる。「ひとまねこざる」こと、おさるのジョージもとんでもないいたずらっ子である。次から次へと新しいことに首を突っこみ、ほとんどいつも失敗してはひどい目にあう。しかしピーターと違うのはへこたれずすぐに明るく立ち直り、次の新たな行動を起こすことである。その明るさが、ピーターラビットとはまた違う開放的な笑いに結びついていると言ってもよいだろう。ジョージの行動力はさし絵の躍動感によってさらに強調されている。構図的にも動きを感じさせるダイナミックなものが多いし、登場キャラクター以外の背景はほぼいつも、のどかな田園や美しい自然であるピーターラビットに対し、ジョージの方はアフリカから船上、海中、町、牢屋から電線、風船に運ばれ空中、と目まぐるしく移り変わる。そして最後はすばらしい動物園に落ちつく、という何とも屈託のないハッピーエンドである。この両作品と今までの説明を重ねてみると、アメリカは若く理想に燃え新しい進歩を求め、明るく開放的で楽天的で単純、イギリスは古く複雑な歴史を持つことから、ものごとを重層的にとらえようとし、現実を冷静に見つめながらも想像力を持ち、古くから伝わるよいものは大切に守ろうとする、という図式が浮ぶ。もちろんこれはきわめて限られた例からの単純化にすぎないが、一つの傾向を示しているものと思われる。

付記

本稿は1993年度北星学園女子短期大学公開講座第4回「児童文学に見るイギリスとアメリカ」をもとに再構成したものである。

ブックリスト

大きな森の小さな家

農場の少年

大草原の小さな家

プラム・クリークの土手で

シルバー・レイクの岸辺で

以上、ローラ・インガルス・ワイルダー作（福音館書店）

長い冬

大草原の小さな町

この楽しき日々

はじめの四年間

以上、ローラ・インガルス・ワイルダー作（岩波少年文庫）

ハックルベリイ・フィンの冒険

マーク・トウェイン作（新潮文庫）

ライ麦畑でつかまえて

J. D. サリンジャー作（白水Uブックス）

クローディアの秘密

E. L. カニグズバーグ作（岩波少年文庫）

シャーロットのおくりもの

E. B. ホワイト作（法政大学出版局）

A Wrinkle in Time

Madeleine L'Engle 作（Scholastic Book Services）

A Wind in the Door

Madeleine L'Engle 作（Dell）

くまのプーさん

A. A. ミルン作（岩波書店）

くまのパディントン

M. ボンド作（福音館書店）

風にのってきたメアリー・ポピンズ

P. L. トラヴァース作（岩波書店）

ドリトル先生物語全集（全12巻）

ヒュー・ロフティング作（岩波書店）

ナルニア国ものがたり（全7巻）

C. S. ルイス作（岩波書店）

ホビットの冒険

J. R. R. トールキン作（岩波書店）

指輪物語（全3部、6分冊）

J. R. R. トールキン作（評論社）

The Silmarillion

J. R. R. Tolkien(Allen and Unwin)

ピーターラビットのおはなし

ビクトリクス・ポター作・絵（福音館書店）

ひとまねこざるときいろいぼうし

H. A. レイ作・絵（岩波書店）

英米児童文学

高杉一郎編著（中教出版）

児童文学論

L. H. スミス作（岩波書店）

英米児童文学読本

定松正・谷本誠剛作（桐原書店）

Only Connect

Egoff, Stubbs, and Ashley, eds.
(Oxford)

ファンタジーの世界

佐藤さとる作（講談社現代新書）

イギリス児童文学論

吉田新一作（中教出版）